## １　主題

# 自ら学び続けるこどもの育成

### ～こどもの実態からの学びの創造　深い学びへと導く見取りと支援～

（全教科・全領域）

## ２　主題設定の理由

昨年度より、中学校区の共通した研究主題として「自ら学び続けるこどもの育成」を念頭に研修を進めてきた。

本校として「自ら学び続けるこども」を次のように考え進めてきた。

自ら学びの目標を決め、その目標に向けて学習方法や学び手(誰と)、学習材(資料)などを自ら選択して、学習を進めていくこと、そして、次の学びを生み出すような、自らの学びのふり返りをもち、学びを深めていくことができるこどもである。

その具現化に向け、昨年度は LDX 事業の協力校として、研究指定校である郡山小学校の先行授業を行った。また、それと合わせて、各職員が年度初めに自分自身の ICT 端末活用スキルを念頭に年間のめあてをたてた。そして年間を通して「やってみよう」ということで、毎日のように ICT 端末の積極的な活用を進めてきた。

そんな中、こども達は ICT 端末を使用することに対して抵抗は少なくなってきており、少しずつではあるが、やりたいことを表現したり、教え合ったりできるようになってきた。また、少しずつ相互参照する姿も見られるようになってきた。しかし、以下のような課題も挙げられる。

・『ICT 端末活用を「やってみよう」』から『「深い学び」につながる活用』へ
・こどもの学びが、まだ「深い学び」につながっていない。
・目の前の（栄小学校の）こども達に応じた実践がなされていなかった。
・授業形態として、個人、ペアやグループ、あるいは不特定多数の協働的な学びを取り入れられたが、いずれの形態も、こども達の安心感や心理的安全性があってこそ「深い学び」に繋がると考えられる。そういった意味で「なかまづくり」を大切にし、その中で相手の思いや考えを受け止めたり、互いに認め合ったりすることが求められる。
・「自由進度学習」や「複線型の学習」について、教科や単元、学年によって向き不向きがあるため、そこを見極めて実施しなければならない。
・手探り状態の ICT 端末活用及び「個別最適な学び」「協働的な学び」を試みる中で、こども達を正しく見取り、目の前のこども達に応じた指導・助言・支援が行えていないことがあった。

こういった課題を今後追及していくために、三つのことに重点を置き研修を進めていきたい。

一つ目は、私たち教師がどの子も「安心して学べるなかまづくりや授業づくり」についての研修をさらに深めていくことである。それは、なかまづくりが、多様性を尊重し、支え合う心を育む人権教育の土台だからである。誰もが安心して学べる居場所を作り、ともに成長する喜びを知

ることで、豊かな人間関係を築き、社会をより良くする力が育つ。そういった意味での、なかまづくりを進め追求していくことが、こども達の安心感や心理的安全性を担保し、こども自身の学びの方法や共に学ぶ相手（他者）、学習材などの選択、自分自身の課題見つけやその発信などにつながる。

二つ目は、教師の専門性である「見取り」である。

「自ら学び続けるこどもの育成」を実現するための第一歩は、こども一人ひとりの内面に起きている学びを、教師が正確に捉えることから始まると考える。すなわち「見取る力」である。目に見える「事実」だけではなく、その背後にある「思考の動き」を推察する専門性である。この見取りこそが、こどもに「先生は自分の学びを分かってくれている」という安心感（心理的安全性）を与え、「自ら学び続ける」原動力となると考えられる。

三つ目は、「介入・支援」である。

確かな「見取り」は、教師の次の一手を鮮明にする。私たちが本年度追求するのは、個に応じた「介入・支援」の仕方である。「いつ、いかなる方法で、その子に関わるか」。私たちの専門的な介入が、こどもの「自ら学ぶ力」を促進させる鍵になると考える。

以上の三つに重点を置きつつ、2026年度は、すべての教育活動の基盤であるなかまづくりを学校全体で進めながら「自ら学び続けるこどもの育成」を目指して研究主題を設定し、研修を進めていくこととした。

## ３　具体的方策

**「自ら学び続けるこどもの育成」のために**

### （１）「安心して学べるなかまづくりや授業づくり」

自分たちで学びを展開していく自己調整学習だからこそ、互いに考えたことを否定されない安心感の構築と、周りの困り感に気づく力が必要不可欠である。そのためにも、日常から互いのちがいを認め合い、つながろうとするなかまづくりが重要な鍵となってくる。教師が日々のこども同士のトラブル（＝自分たちで問題を解決していくチャンス）にていねいに対応したり、こども理解を深めたりすることで、こどもたち全員が安心して学べることにつながっていくと考える。そこで以下のように具体的方策を示した。

**〇具体的方策**

**① 互いの思いや考えを伝え合い・受け止め合う活動の充実を図る。**

・伝え合い・受け止め合う活動の目的をはっきりさせて取り組む。（意図を明確に）

・あらゆる学びの中で、伝える相手や場面の設定を意識させる。

・伝え合い・受け止め合う活動のルールを各場面で設定し、徹底する。




**② 伝え合い・受け止め合うための手立ての充実を図る。**

・ペア・小グループ・全体での交流
・ポスターセッションなどでの交流
・こどもの作文（綴り方）を教材にした交流
・クロムブックなど ICT 機器を活用した交流

**③ こどもの実態をとらえ、教職員間で意見交換をしながら学級づくり、なかまづくりを進める。**

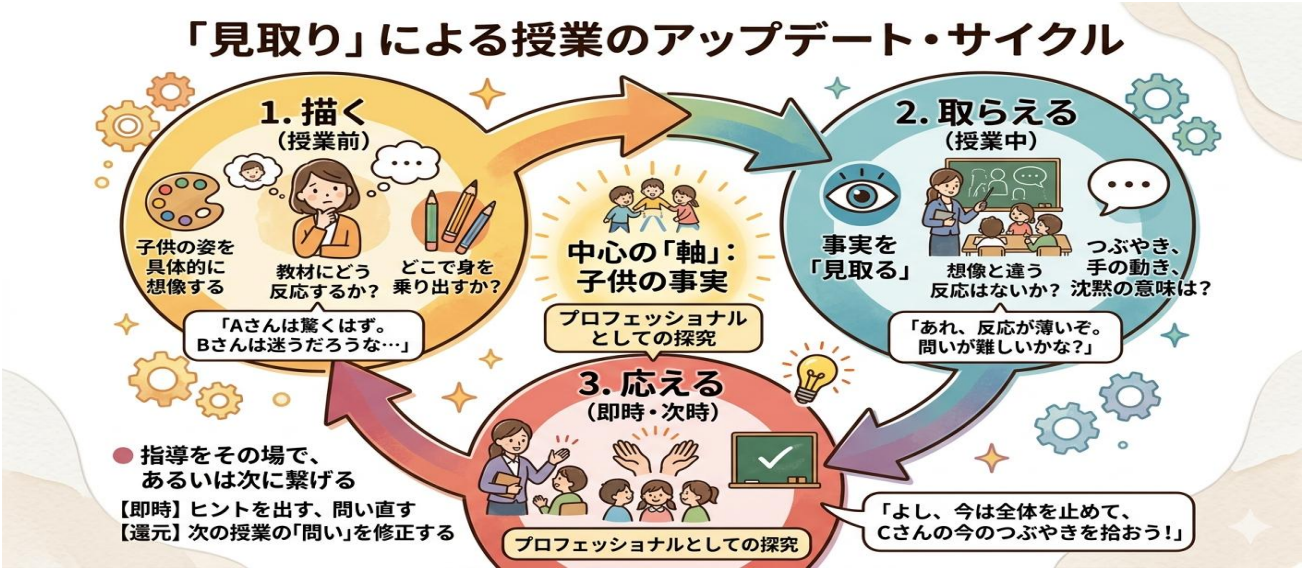
・職員研修
・なかまづくりのレポート
・こどもの様子交流会
・日常での会話より

## （2）教師の専門性である「見取り」

そもそも「見取る」とは何か。「見取る」を英訳すると「Assessment」になる。つまり、客観的な事実だけで終わらせるのではなく、その事実の裏側を読み取ることが真の「見取る」なのである。

例）「（活動中に）違う話をしている。」⇒「どうして違う話をしているのか？」
（教師の質問の仕方に課題？こどもたちの学力にあっていない？興味がちがうところにいっている？何かあったのか？）

例に示したように様々な観点でこどもたちを見取ることができる。この見取りが充実すると、教師のスキルアップだけではなく、こどもたち一人ひとりの背景を知ることにも繋がり、様々なアプローチをすることができるのである。以下に示したように、「見取り」をベースとしたPDCAサイクルを私たちが行うことで、自ら学び続けるこどもの育成につなげていきたい。




## ○具体的方策

### ①授業内での「見取る」ポイントの共通理解を図る。(参観の観点)

i)教師の言葉がけ (学びを促進するためにどのような言葉がけがあったか。)

ii)こどもたちの反応(つぶやき、視線などはどうか。)

iii)こどもたちの変容(何をきっかけにこどもたちは学びに向かうのか。)

iv)こどもたちの振り返り(教師が意図している以上たどり着けるのか。)

・月に２回以上はほかの学年の授業を参観し、授業記録見学シートに参観の観点に基づき、記録をしていく。

### ②アンケートやメディアバランスから見取る。

・4月と12月にこどもに対しアンケートを実施する。(1年生は7月と12月)アンケートの中から「国語の勉強はすきですか。」「自分の気もちがきちんと伝わるように友だちに話していますか。」等の項目について分析し、取組の前後の変容を分析していく。

・メディアバランスを年5回実施する。どれだけ学習に対して意欲があるのかを分析し、必要に応じて個々に指導する。(評価する。)

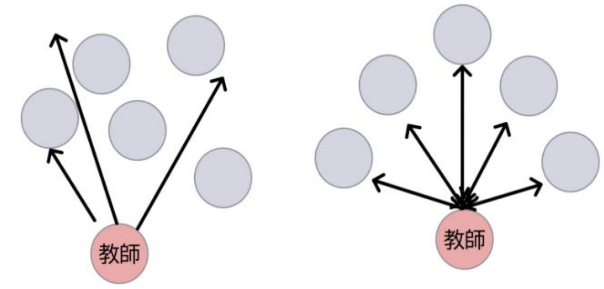
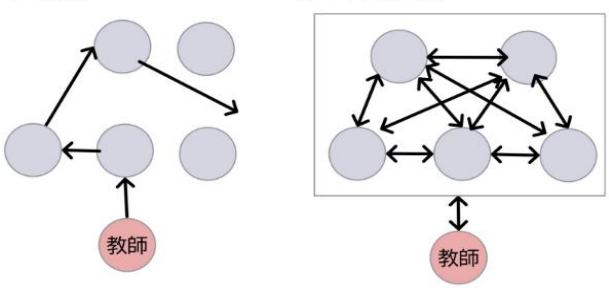
### ③授業以外でのこどもの様子を見取る。

・こどもとこどもの関係性を見取る。→誰と学習をすることで効果が生まれるのかある程度見取ることで、さらなる学びに繋がる。

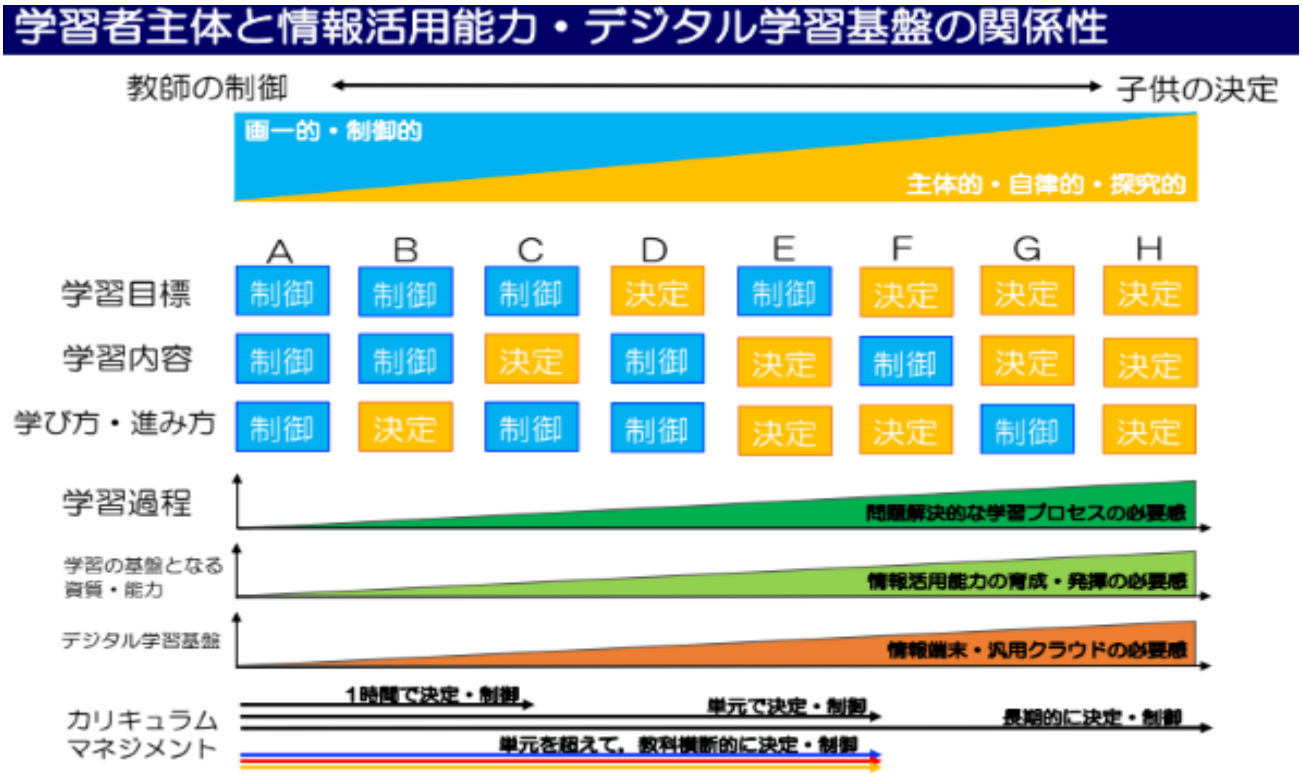
・積極的に家庭と繋がる。（電話連絡や家庭訪問など）
・綴り方を通じてこどもたちの背景を知る。
・職員同士でこどもの情報を共有する。（普段の日常会話から）

## （3）「介入・支援」

（2）の見取りをしたあと実際にどのようにこどもたちにアプローチ（支援）をしていくかが重要な鍵となる。ただ、授業のスタイルによって、介入や支援の方法は異なってくる。そこで以下のような授業スタイルの場合、どのようなアプローチを行うことが効果的であるのかを示してみた。今年度は、どの学年でもどちらの授業観の授業も経験し、こどもたちにとってどの方法が一番「自ら学ぶ手立て」になり得たのかを検証していくこととする。

| 従来の授業観 | 新しい授業観（協働的な学び） |
|---|---|
| 【流れ星型・扇形】<br><br> | 【三角型】　【ダイヤモンド型】<br><br> |
| 【授業観】：知識注入型<br>〇教師がコントロールしやすい<br>〇知識を伝えたいときに有効<br>△こども同士のつながりが築きにくい。<br>△「聞いているだけ」の児童が増える。 | 【授業観】：協働的な学び<br>〇こども同士の意見がつながりやすい。<br>〇自立したこどもの育成につながる。<br>△教師やこどもの言葉がけで良くも悪くも変わりやすい。→学力の定着にも関わる。 |
| 【教師の役わり】<br>**⇒正解に導く知識の伝達者**<br>・学習の仕方が間違っているときの軌道修正<br>・切り返し発問「本当にこれでいい？」<br>・誰かの困り感を出発点にみんなで考える。（まちがいを価値づける。）「〇〇さんの困っていることをみんなで考えよう。」<br>★いかにポイントを的確に伝えられるか。<br>★机間巡視をして何を全体で取り上げるのか即時性が重要。<br>★意見と意見をどう繋げるか。 | 【教師の役わり】<br>**⇒思考を揺るがせるファシリテーター**<br>・対話が途切れたとき<br>・話がはずれたとき<br>｝の軌道修正<br>・教師が教えるのではなく、こども同士の考えをつなぐための声掛けをする。<br>「〇〇さんの考えと似ているね。」<br>・思考をさらに深めるための発問<br>「別の視点で考えると、どうかな？」<br>★あくまでこどもに気づかせるような介入を！<br>★こども同士の介入も促す声掛けを！ |

（参考資料）




国立大学法人 信州大学教育学部 附属次世代型学び研究開発センター 佐藤和紀氏 スライドより（2026）

参考資料に示したように、こどもたちが学習の目標や内容、学び方等を決定する（H）ほど、情報端末が必要不可欠となり、情報活用能力の育成は必然的であることがわかる。日ごろから、ICT 機器をどの場面で使うと効果的であるのか、授業をデザインするときに考えていきたい。

また、こどもたちが主体的となれるよう教師の授業観をアップデートしていくことも必要不可欠である。従来の授業観（A）も大切にしつつ、こどもたちに学びを委ねていく自己調整学習の授業スタイルにも積極的に進めていき、どのような見取りが必要であり、支援が必要であるのかも検証していきたい。

## 学びを広げる ICT 機器活用の基礎を学ぶために

### （１）ICT 機器活用の推進を図る

こども達が、個別最適な学びや協働的な学びを得るためには、その学びのきっかけを作り出す教職員が、最低限 ICT 機器を使い、こども達へ学びの選択肢を与える準備をする必要がある。しかしながら、その土台となる、職員の ICT 機器のスキルや活用機会に差があるのが現状である。それらの課題を解消するために、学校全体としてどの教職員も ICT 機器を使う機会を設け、増やしていくことが重要課題であると考えている。（校務 DX も推奨していく。）

**〇具体的方策**

**① ICT 機器活用方法を知る。**

・日常的に、ICT 機器を通した授業についての意見交換を行う。

・活用方法を記した HP や教育委員会が作成している資料、有用な動画などを紹介し合う。

・校内でミニ研修を定期的に行う。

・校外の研修等に積極的に参加し、還流する。

**② 知ったことを、実践してみる。**

・①を通して知った、見聞きしたことを、「真似て」みる。

・知ったことを、学習場面に「反映できないかを考え」、実践して可能性を広げる。

### (2)ICT 機器の活用から学びを深める

(1)で得た活用方法から、より有効な活用へつなげるためには、試行錯誤が必要不可欠である。それらを積み重ねることにより、効果的な機器活用が進み、ひいては、こどもたちの深い学びへとつながると考えられる。

**〇具体的方策**

**① 実践したことから学ぶ。**

・ICT 機器活用の様子を見合い、意見交換を行う。

・月２回以上の授業見学(フリー参観)を行い、気づきをシートにアウトプットし、全職員で共有できるようにする。

② 効果的な活用を考え実践する

・経験や学びを生かして、板書計画などをもとにしたICTの効果的な活用を考え、実践する。そしてこれらの実践のふり返りを行うことで、より効果的な学びのための ICT 機器活用の探究及び意見交流を行う。（夏季研修、研修のまとめで）

## 4 研究授業の進め方

（１）ねらい

こどもたち一人ひとりが深い学びに向かうためには、どのような見取りが必要で、どのような支援を行えばよいのか、４本の全体研究授業から考察していく。したがって、目の前のこどもたちの姿を通して、「教師のあり方（役割）」について考えていくことをねらいとする。

（２）参観の観点

★教師の声掛け（誰に、何を、話しているか。授業者の意図について考える。）

〇こどもの反応（課題への意欲）

〇こどもの変容（教師のどのような支援でこどもが変容したかを見取る。）

（3）指導案について

中学校区に合わせた指導案を使用し、原則として本校ではこの型で統一する。

例）●学年 ○○科学習指導案

日時

場所

指導者

1.単元名

2.目標 （それぞれの観点別で）

3.指導上の考察

（1）教材観

（2）児童について

（3）指導観 ←現状のこどもの様子をふまえてどのような力をつけたいためにどのような授業づくりを行うのか、指導者の意図を明確にする。

4.指導計画（全●時間）

| 時間 | 学習内容 | 評価の観点 |
|---|---|---|

5.本時の指導（ / ）

（1）目標

（2）本時の流れ

| 主体的・対話的で深い学びを実現する具体的な学習活動（こどもを主語にして） | 指導上の工夫 |
|---|---|
| （導入） | |
| （展開） | |
| （終わり） | |

（3）資質・能力が育成され「深い学び」が実現しているこどもの姿

（4）主体的・対話的で深い学びを実現する教師の指導

※（3）のこどもの姿を仮定したとき、どのような指導を行うのかを教師の一工夫を書く。

（5）評価の観点

（6）参観の観点（※授業者としてどこを見てもらいたいか。授業の推しポイント）

（別紙）座席表

【その他】

○指導案は、授業の一週間前には、classroom にて掲載する。

○事前研修が必要であれば、研修担当に相談。（2週間前までには済ませておきたいところ・・・）

（4）研修日程について

| | |
|---|---|
| 一学期 | 4月10日 校内研修会<br>「中学校区での研修のあり方について」<br>4月22日 校内研修会（本校の研修の方向性について）<br>4月27日 全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェック(自校採点、入力、分析) |
| | 5月18日 ミニ研修（情報担当より）<br>6月 8日 研究授業<br>7月21日・23日 算数教室 |
| | 8月21日 校内研修会「実践交流」<br>「全国学力・学習状況調査、みえスタディチェック分析」<br>「2学期に向けた教材研究（自己調整学習で行うなら…）」 |
| 二学期 | 9月 ミニ研修（情報担当より） |
| | 11月 日 人権研究授業 （事前説明会・事後研） |
| | 11月 26日 研究授業 |
| 三学期 | 1月 25日 研究授業 （事後研） |
| | 2月 日 全体研修会（2026年度の成果と課題・総括）<br>2月 日 みえスタディ・チェック(自校採点、入力、分析) |
| | 3月職員会議にて（2027年度の方向性）→冊子を作り完成 |